

Bonjour 2025. 4月号

2021年 本屋大賞受賞 2024年 映画化

これはこの小説の根拠を言周ると一番に出てくる小書幸及です。昨年に映画化されているということもあり、映画を視聴した、名前を聞いたことがあるという人も多くいると思います。映画を見たことのある人の中ではもしかしたら小説は読んでいないという方もいるのではないのでしょうか。そのような皆さんへは小説が好きな皆さんへ、私はこの小説を読むことを全力でおすすめしたいです、私はこの本の魅力を人に伝えるときに、一言目に「面白い」と答えます。この面白さはもちろん笑えるな、ということではなく、物語として完成しているということです。そしてそこに田田そのこのさんの筆致が組み合わさって感動という言葉では足りず、しきりに感情を揺さぶられ、心が苦しいのに先が気になって仕方がない感覚を味わえるでしょう。人の心が繊細に、また詳細に書かれていて、私たちに綺麗な人間は居ないということを教えてくれます。登場人物の行動が必ずしも心情と一致していないことが人間味に溢れていて、それがこの小説にリアリティを与えています。正直この小説が女子みなのか、あるいは苦手なのかは人によって分かれると思います。しかし、少なくとも私はこの小説を読んで良かったと心の底から感じています。

ここまで基本小説の書き方についてしか触れていないので少しだけ内容に触れようと思います。第一にこの本を読んだ人はこの本についてこのように答えるでしょう。「悲しくて、苦しくてセカないお話、または人間の闇の詰め合わせ、これらは事実ではあります。この作品は人の暗い一面、嫌な現実を描いていて読むのが辛いと感じた場面もありました。しかし、私はこの話はそれ以上に希望を描く作品だと感じるのです。登場人物は様々な問題と向き合う上でお互いに作用して助け合ったり逆に相手を苦しめたり...でも最後には前を向き進んでいく。そんな絶望の中にある希望を描いた作品だと私は思っています。これは「かりは」皆さんが読んで感じないと分からないと思います。

田田そのこの作 「52ヘルツのクジラたち」

またまた書き足りませんがこれをまてこの本の紹介とします。ぜひ読んでみてください。

図書室に
あります!

(新2年)1-3 図書委員

52ヘルツの クジラたち

